

巻頭言

熊本県立第二高等学校長

那須 高久

本校のスーパーサイエンスハイスクール事業は、昨年度は経過措置1年の指定となりました。経過措置の事業を行いながら改めて内容の検討を行い再度申請し、昨年度末に文部科学省から4期目の指定を受けることができました。本年度は、4期目の1年目として申請書に基づいた計画を進めています。本書は本年度の事業の推進状況を中心に取りまとめています。

第4期の研究開発の目的を、「理数科、美術科、普通科の3学科が協働しながら探究活動を行い、熊本地震の経験を科学的に捉えるとともに社会との共創を図りながら創造的復興に向け課題を発見し、豊かな感性を持って具体的な行動に移すことのできる生徒を育成する」と定め、「熊本地震の経験を課題発見につなげ、科学的視点から創造的復興をリードする人材の育成」を研究開発課題としました。

平成28年4月に発生した熊本地震は、私たちの生活に大きな爪痕を残し、発災から約2年が経とうとしていますが、本校でも復旧復興はまだ途上にあります。熊本地震の経験は私たちに様々な課題を与えてくれました。たとえば、本校は避難所となり多数の地域の方々が一時的に中泊を経験されました。避難所としての学校の役割を再認識することとなり、避難所運営に関して地域とのかかわり方について課題を与えられています。創造的復興は、復旧工事といった建物やインフラの整備ばかりではありません。地域からの要望に学校がどのように答えていくのか、これからの課題研究の大きな研究材料の一つにすることができます。

4期目は、理数科、美術科、普通科が協働しながら探究活動を行うことを前面に出しています。これは第3期目から取り組んできた内容ですが、さらに大きく踏み込んで推進しています。学校設定教科として「探究」を設け、美術科では「アートサイエンス(AS)」と「美術探究」の2科目を開講しました。普通科でも「グローバルリサーチ(GR)」を開講し、理数科の課題研究で培ってきた探究のエッセンスを導入しています。3学科合同で特別授業や講演会も行いました。

探究活動を進めるのに付随し授業改善も必要となってきましたので、全教科・全領域で探究型の授業の構築にも取り組んでいます。主体的・対話的で深い学びを実現していくためには生徒の質的な変容を正確に見取る必要があり、指導と評価を一体化することができて汎用性がある「二高ICEモデル」を導入し、全教科・全領域で使用できる評価法の開発も同時に行っています。

施設の復旧工事が本年度になってから本格的に始まり、施設・設備が100パーセント使用できる状況ではありませんが、使用できる施設等を最大限活用して事業を進めてまいりました。関係の皆様には様々な観点から内容を見ていただき御意見をいただければ幸いです。

最後になりましたが、日頃より御支援御指導を賜っています文部科学省、科学技術振興機構、本校の運営指導委員、熊本県教育庁高校教育課の皆様、及び各関係諸機関の皆様に御礼を申し上げ巻頭の御挨拶とします。

